市民タイムス　令和元年（2019年）5月6日

寄贈した日記を見る山崎さん（中）と島さん（右）。左は山崎さんの妻・香さん

筑北・日記の館に自作寄贈

松本の山崎さんが32冊

松本市筑摩２の山崎静雄さん（82）は５日、筑北村坂北の「日記の館１号館」に、平成17年７月８日～30年８月２日に書いた日記の冊子32冊を寄贈した。大病を経験したことなどから、しっかりと保管してくれる場所を探していた。日記の館は坂北出身で、日記の調査・収集・保存などに全国規模で取り組む島利栄子さん（74）＝千葉県八千代市＝が生家の離れを改修して設けた。島さんは山崎さんの日記を公開する企画展を検討する。（小坂　功）

山崎さんは毎日、その日の出来事をパソコンに入力してまとめている。600字前後の文章に、10代半ばの頃から写真や画像を交えた紙面を作り、1日1枚を原則にA4サイズの紙に印刷して、クリアファイルにつづっている。6000枚以上を寄贈した。

妻・香さん（82）と共に各地を訪ねる旅行や近所の人たちとの交流などをしたためてきた。「百舌が椿の木に巣を作り小鳥が五羽生まれたようだ」「今日も一日中色々やって忙しかった」といった記述がある。旅行先の写真など特別な画像だけでなく、買った品物の写真や鑑賞した演奏会のチケットの画像などを添え、文字だけではない現代的な記録だ。

会社勤めを終えた頃、長男にパソコンをもらった。「ぼけないように」と日記への活用を思い立ち、パソコン教室で操作法を覚え、公民館の講座で文章の作法を習った。「毎日、何か書くことはある」と話す。

島さんは会員210人の「女性の日記から学ぶ会」の代表で、資料調査や保管などの拠点とする日記の館は昨年5月に設けた。各地に同じ場所を設けていく考えで「1号館」とした。広範囲から参加者が集まる発表会の会場でもあり、5日には4回目が開かれた。

今年2月に筑北村図書館であった島さんの講演を聴いた際に、山崎さんが寄贈を申し出た。島さんは「心血を注いだ日記を提供いただく。ここ（1号館）の宝物にする」と応じた。今も日記を書き続ける山崎さんは寄贈した日記について「読んでもらえれば。こうやって暮らした一市民もいるのだと知ってもらいたい」と話している。